

母から子へ

まつした しんべい
松下 慎平

受賞のことば

「来年は応募できないのか」
大賞選出の連絡を受け最初にそう考えたとき、自分が世にも珍しい「優勝エッセイ賞中毒」であることに気づきました。文筆力が向上した後に書きたかった記憶や経験はまだありますが、光栄な賞をいただいたからには胸を張り、前を向き格好良くこの舞台を後にしたいと思います。最後に一言。大外枠でいい。賞金もいらさない。邪魔もしないから来年も参加させていただきませんか？

プロフィール
奈良県出身。県内の畝傍高校を卒業後、豪州にて見習い騎手のライセンスを取得。帰国後、大阪大学経済学部に入學するも中退。現在は相方の後藤祐太と共に『テンポイント』というコンビで芸人として活動中。

「ビリーヴという子が勝つて」

乗馬クラブの静かなリビングで競馬中継を観ながら、帰りのシャトルバスを待つ私は不意に声をかけられた。テレビの中ではもうすぐ発走するスプリンターズSの有力馬の解説をしている。声の方に目をやると、クラブのインストラクターに『シノブちゃん』と呼ばれている私と同じ年の少女が立っていた。

高校3年の秋、私は騎手になるべく翌年に豪州の競馬学校へ入学することを決意し、夏頃から本格的に乗馬を開始した。田舎の小さな乗馬クラブである。1ヶ月も通うとはば全ての会員の顔を覚えることができた。中でも高校生以下のジュニア会員は私を含め5人ほどであり、その中の1人がシノブであった。焼けた肌に私より短い頭髪。彼女は私とは別の高校の生徒で中学生の頃から週1のペースで乗馬クラブに通っており、高校では女子ソフトボール部のキヤプテンなんだとインストラクターから聞かされていた。当然、乗馬の技術は騎手志望の私よりはるかに上手い。そんな彼女を私は毎度バツ悪く眺めていた。

そんな彼女が前触れなく話かけてきたのだ。

「まつっんはどの子が勝つと思うん？」

まつっんとは敬意にしていたスタッフが私につけた呼称である。私をそう呼ぶ人間は他にはいなかった。このとき

までは。

「ショウナンキャンプ」驚きと動揺でずいぶん味気のない返事になってしまったことを一瞬後悔したが、それで気を悪くした素振りもみせず「私はビリーヴって子やと思うわ」とシノブは再度繰り返し返した。さすがに牝馬にはしんどいやら、と知った風な私の言葉に

「この子、女の子なんや」と彼女は答えた。どうやら牝馬だと知らなかったらしい。

「名前がいいやん。私と似てる」

似ている？ シノブ、ビリーヴ。確かに文字こそ違うが最後の発音は一緒である。あ、もしかしてシノブではなくシノヴなのか。

「んなわけないやろ。お役所が許さへんわ」乗馬だけじゃなくつつこみもお上手である。

「字面じゃなくて意味の方。ビリーヴって信じるっていう意味なん知ってる？」あたりまえだ。こちとら半年後には豪州住まいである。

「うちの名前、志を信じるで志信。ええ名前やろ」そう言っただけで彼女は笑う。そんな会話の終わりを待つことなくスタートは切られた。

「まつっん、この子達何メートル走るん？」

後に知ったのだが彼女が競馬をちゃんと観たのはこれが初めてだった。そんな競馬ビギナーが勝つと宣言したビリーヴが牝馬として6年ぶりに栄冠を手にしたのであった。

それ以降、私たちは友人としての距離を詰めていく。と

いうより、志信が一方的に詰めてくるのだ。彼女はその日、駅に向かうバスに乗っている30分で私から恋人の有無まで聞き出した。その答えは残念ながら無であったが、思春期の真っ只中の私はもしや自分に好意を抱いているのではないかと浅はかにも考えた。が、どうやらそれは間違いで、彼女には野球部に所属する彼氏がいるらしい。バスの発着駅にはその彼氏が迎えに来ていた。自分の彼女と一緒に降りてきた男に怪訝な視線を送る彼の元へ私を引っ張っていき、

「これ、まつっん。将来、海外で騎手なんねんで。仲良くしたって」と言うのだった。

なし崩し的に私の友達がまた1人増えた。

秋が終わるころには、私も上級のレッスンへと進み、彼女と一緒に乗る機会が増えた。

「まつっんは障害飛ぶとき体起こすのちよっと早いな」等とアドバイスもくれた。そのころにはバツの悪さはなくなり、アドバイスのとおり傾けていたが「騎手になつたら私のこと姉弟子って紹介してな」という申し出は丁重にお断りさせていただいた。

年が明け、毎日2回だったレッスンを4回に増やすことにした。その分、金もかかる。私が通う乗馬クラブではレッスンごとにチケットを購入する必要があるのだが、ジュ

ニア会員には馬房を3つ掃除するとチケットが1枚貰えるというシステムが存在した。私も志信もそれを利用しており、彼女にいたっては馬房掃除だけでいいやとレッスンを受けて掃除をし、馬と戯れて帰るだけの日もあった。とはいえ馬房にも限りがあるので1会員につき6馬房までしか担当させてもらえない。つまり、増やした2レッスン分は他で工面しないといけない。何かいいバイトはないかと考えていた私の元に志信がやってきた。「はい、お年玉」と彼女は輪ゴムで縛られたレッスンチケットの束を私に差し出した。「高校卒業するまでに使いきれんから、まっつんにあげるわ」と彼女には珍しく照れくさそうに言った。さすがに貰えないと断ると「黙ってもらついたらええねん」と決して安くはないチケットの束を私の鞆に無理やりねじ込んだ。

それから渡豪まで彼女の厚意を無駄にしないように熱を入れて馬に乗り、バイトにあてるつもりだった時間で英語を勉強した。

最後の日、志信が「もう全然私よりうまく乗るやん。むかつくわ」と笑って言うのがとても嬉しかったことを今でも覚えてる。

結局貰ったチケットは全部使いきれず2枚余らせてしまった。それを大きなトランクケースの端に忍ばせ私は豪州に飛び立った。

渡豪した私は順調な学校生活をおくった。騎乗力は学内でも中の上くらいであったが、英語力と身体テストの成績がよかったため1番上位のクラスで学校の履修課程を終えることができた。牧場や厩舎への研修の順番も優先してもらえる。このままいけば近い将来、騎手として必ずデビューできる。

そんな希望に満ちた中での落馬負傷、長期的に考えて騎手としての活動は厳しいという無情な診断を私は異国の地で受けた。

帰国する前日からつぽになった部屋で私は志信にメー

ルをした。怪我をしたこと、騎手を諦めること、日本に帰ること、そして厚意に報えず申し訳ないということ。

長文のメールへの返信はすぐ帰ってきた。

「帰ってきたらご飯いこう!」

しかし、帰国した後に私達が会うことはなかった。負い目があった私は彼女からの誘いを理由をつけて断り続けた。彼女もそれを察してか、いつからか連絡をよこさなくなった。

それからなんやかんやあって、私は芸人になった。それはもう壮大なんやかんやではあるのだが今回は割愛させていたきたい。

志信と音信不通になって7年、芸人になって1年目の秋、地元テレビ番組に出演することになった。内容は日曜のお昼にショッピングモールからネタを中継するというもの。地方局とはいえテレビである。多くの人に見てもらいたいとSNSで告知もした。

当日、初めてのテレビということで緊張し、若干テンポは速かったが上々の出来で漫才を終え、中継が切り替わり、お役御免と楽屋に引き返す道中で声をかけられた。

「まっつん!」視線の先には2人の友人がいた。志信とその彼氏君、改め旦那さんであった。志信のお腹には赤ちゃんがいることも一目でわかった。8年ぶりの予期せぬ再会に言葉を失う私に向かって志信が口を開いた。

「漫才おもしろかったで」

こみ上げるものをなんとか押し殺し

「ありがとう」と返すのが精一杯だった。

「でもテンポちよつと速かったな」

さすが私の姉弟子である。手厳しい。

「なあ今日のスプリンターズSどの子が勝つと思う?」いつかどこかで聞いた会話だなと私は笑い「ロケットマン」と答えた。

「そっちは何が勝つと思う?」「カレンチャン」すぐに答えは返ってきた。牝馬には厳しいやろと性懲りもなく愚かに口を開こうとする私を待たず「カレンチャンが勝つて、お腹の子が女の子なら名前はカレンにしようかな」と、母親の顔をしながら彼女は言う。

「ほんならロケットマンが勝つて男の子が産まれたら息子の名前ロケットマンにしてな」「なんでやねん」最高の間だ。さすがである。

「じゃあ芸人のお仕事頑張つて」と帰ろうとする彼女を引き留め、

「もっと大きい舞台でネタできるような芸人になるわ」勝手な約束事のように私は言う。

「うん。信じてるから。頑張つてな」と変わらぬ人懐こい笑顔を浮かべ彼女は答えた。

さらに11年の月日が流れ、2022年のスプリンターズSを制したのはビリーヴの仔、ジャンダルム。その勝利にいてもたってもいられず、届くかもわからないアドレス宛てメールを送る。しばらくして返信があった。

「うちのジャンダルム君」という一文と共に、懐かしいあの乗馬クラブで息子を前に置き、母子で楽しそうに馬に跨る写真が添えられていた。あのときお腹にいたのは男の子だったようだ。名前はなんだろうか。まさかロケットマンということはあるまい。そんなことを考え再びメールに目をやると、まだ文章に続きがあることに気付いた。

「来年からジュニア会員で通うねん。将来、誰かさんみたいに海外で騎手になりたいって言いだしたら色々教えてあげてな」

そんな日がくればいいなと私は切に願う。

机の引き出しには色褪せた2枚のチケット。今でも有効かわからないけど、いつの日か必ず渡そう。馬上で彼女そっくりに人懐こく笑う、また名前も知らないその少年に。